# 日本語でも異文化体験

高橋　純

違う土地に住むと、ことばの違いがよく目につく（耳につく）。しかし、まるで違うことばは、実はそれほど苦にはならない、というか苦労しない。まるで違うのだから覚えてしまえば、わかるようになるし、また少し難しくはあるけれど、使えるようにもなる。しかし一番大変なのは、形が同じでかつ使用場面が似ており、しかし意味が違っているものである。

私は群馬県の出身で、島根に来る前は、十二年間東京と横浜に住んでいた。西日本を経験するのは初めてであった。そして、気がつけば八年という歳月が島根で流れた。しかし、八年経っても、まだすぐに頭の中で本当の意味にたどり着くのに困難な用法がある。それは、「えらい」と「売れてる」である。

## 私、ホントえらかったわ

「えらい」は、松江では通常、第一義的には「つらい・骨が折れる」という意味であろう。このような使い方は共通語にもある。「えらい目にあった」などがそうであろう。しかし、国語辞典によると、「えらい」は「①人物・行動などが優れていて立派だ。偉大だ。②社会的な地位・身分が高い。③《口語》程度が甚だしい。また、大変だ。」（森岡健二・徳川宗賢ほか編『集英社　国語辞典』集英社、一九九三年）とあり、自分の語感もこの辞書に近い。つまり、意味的には重なっているものの、その語を聞いたときに思い起こす意味の順位が異なっているのだ。

しかし、困ったことに、「つらい・骨が折れる」という意味と「立派だ」という意味はしばしば使用場面が同じであることもある。このようなとき、話しているもの同士、念頭に置いている意味は違うのに、妙に話のつじつまがあってしまい、会話が成立してしまう。例えば、ある学生が自転車に乗って高校に通っていたという話をしたことがある。

学生「毎日、自転車で十キロ以上も通ったよ。雨の日も自転車だけん、ホントえらかったわ！」

私「そっか、雨の日も自転車だったんだ。本当にえらかったね～」

学生は「通学がしんどかった」ということが本当は言いたいのに、私は親に面倒をかけることもなく自転車で通って「立派だ」ね、と答えていた。松江に移った当初、こちらの学生はシャイのくせして、やたらと自分をほめるものだと思っていた。

## コンビニでも売れてるよ

続いて「売れてる」という表現だ。これは比較的若い世代に流通している用法のようではあるが、松江では「売っている・商品を扱っている」という意味で用いられている。しかし、私の語

感では、「売れてる」は「売れ行きがいい」という意味だ。そうなると、これもまた意味は違っているのに会話が妙にうまく成立してしまうことがある。

学生「○○チョコって、おいしいが～！

先生も食べる？」

私「へェ～、こんなの見たいことないね。新商品？」

学生「そうそう、コンビニでも売れてるよ」

学生は単に「おまえは珍しがっているが、こんなものはコンビニでも扱っている。どこにでもある商品だ！」と言っているにもかかわらず、私は「そっかこれは最近若者の間で流行っている商品か～」と思い、若者のトレンドを一つゲットしたつもりで、ちょっと自慢げ!!

意味を明確にしないまま外見だけで会話をすましていると、実はとんちんかんな会話であることはわからない。

## 鶏が猫を食べた？

右記のように、ことばの形が同じで使用場面も同じ、でも意味が本当は違っている。このような状況を言語学では「同音衝突」と呼ぶ。言語学的に定義すれば、「音変化のため同音異義語が生じたり、新しく伝播してきた語がもとから使われている語と同音異義語になる場合に、それらの同音異義語が同じ場面や文脈で用いられ、誤解や混乱などコミュニケーションの支障を生じさせること」（田中春美編『現代言語学事典』成美堂、一九八八年、「homonymic conflict」の項目より）となる。これは、歴史的な言語変化の原因の一つともなっている。有名な例として言語学でよく取り上げられるものに、フランスのガスコーニュ地方の猫と雄鶏の衝突がある。それぞれラテン語に由来するcattusとgallusであったが、音変化の結果、両語ともgatとなり同音になってしまった。これら両者は比較的同じような使用場面で出てくる可能性があり、結構困ったことになる。例えば、「gatがgatに食われてしまった」と言って、「鶏が猫に食べられてしまって損害が出た」などと思っていたら、「鶏が猫を食べて、大ニュースになっていた」なんてことだってあるかもしれない。まぁ、ないとは思うけれど……。

言語学でいう同音衝突は、ことばの変化や新しい語の流入などによるもので、ことば自体が問題にされるが、先に示した私の例は、違う言語（方言）を話す人間が移動して、その人間の脳内でコンフリクトが起こっている例だ。

これに関しては、自分の方言の方が共通語に近いと威張ってみせても、その土地に入ったからには、その用法を覚えなければ、コミュニケーションがとれない。わかってはいるけれど、なかなか頭の中に既にセットされた語形と意味を意識的に乖離させるのは難しいものだ。

「えらい」を再度、例にとれば、松江でも「立派」だという意味はあるので、一概に「えらい＝つらい・骨が折れる」としてしまってはいけない。

## 異文化体験の始まり

こんなことばのちょっとした違いを体験することは、実は、異文化体験の始まりだと思う。異文化体験は、自分たちにとって当たりまえであったことが、当たりまえではない世界を体験することだ。私たちは、「日本人」として「日本語」を話している。そしてあ

る程度、日本で成長した人は「日本語」を「自由」に使いこなす。ある意味、自動的に自然に思ったことが口をついて出てくる。そして言語は社会的な側面として世代間に継承され、ある一定の地域で共有されなければならない。だから、本当はあまりことばの意味に多様性を持たせてしまうと、コミュニケーションに困るのだ。でも、そんな当たりまえに同じであるはずのことばにズレがあるということは、その人の頭を柔軟にしてくれる。

こんなまどろっこしい環境で会話をすると、コンテクスト（文脈）が非常に重要になってくる。同じ用法のことばを話しているという前提のもとでは、単語が文脈を規定することができる。だから、少々いい加減に話を聞いていても、単語の種類で何となく理解する。しかし、同じ形の単語にもかかわらず、意味が、もしかしたら違っているかもしれない環境では、文脈で単語の意味を規定することになる。つまり、人の話をよく聞かなければならない。

だから異文化理解とは、実は、聞／聴く力なのかもしれない。

## 〝そんな〟つもりで言ったわけではないのに……

実は更に細かいところにまで言及すれば、その人の全体の語彙の量や経験などによって、個人で用いる語の意味にも若干の違いがある。同じことばを話しているようで、常に若干の差異を生じながら会話を成り立たせている。なかなか自分の言っていることが伝わらなかったり、相手の言ったとおりにしているのに怒られたり、こちらは〝そんな〟つもりで言ったわけではないのに、〝そんな〟意味で捉えられてしまったり。コミュニケーションを成り立たせるのは非常に〝えらい〟ことである。

## 本当のコミュニケーション力

ここ最近、表現力を鍛えることがコミュニケーション力を鍛えることとされ、表現することばかりにスポットライトが当てられている。しかし、本当のコミュニケーション力とは、聞／聴く力があってはじめて成立するものだろう。表現することばは、相手に届かなければ言わないのと同様だ。聞／聴く力があって、相手の本当に言わんとすること（に近いこと）を理解し、その文脈にあった表現をする。これならば、相手も理解がしやすくなり、本当の表現力に結びつく。また、聞／聴く力のない人は、自分のことばが相手にどう届くかに無頓着になるのではないだろうか。インターネットの掲示板などに書き散らかされている無神経なことばは、こんなところに起因しているのかもしれない。

ある一つの土地に留まっていたり、共通語に近いことばを話していたりする人は、ついつい自分を中心だと思いがちである。当たりまえであると思い込んでいる日常の日本語から異文化体験をすることもできるのではないだろうか。

（たかはし・じゅん／言語学）

■

# 記号論の危機!?

トイレのマークはだいたい世界共通のものになってきていると思うが、中には変わったものがあったりする。そうすると、授業で記号を扱っている手前、「この記号はどうのこうの、アーだ、コーだ」と話をする際、おもしろいネタになるので、デジカメに納めている。しかしこれが、なかなかリスキーな仕事である。昨今、迷惑防止条例違反（ケイタイのカメラでスカートの中を撮影するような事件）だ、ストーカーだ、何だ、かんだ、と変な事件が多い中、おじさんがカメラを持って、女性トイレの前をウロウロするというのは何とも怪しい。仕事に身体を張っている姿は、本当はかっこいいものですが、これは何とも間抜けです。

ところで、おまけにもうひとつトイレネタ。トイレの男・女のマークの下にMen や Women などと書いてあるものもある。ドイツでは、この文字の部分がドイツ語で書いてある。この部分は男が Herren（gentlemen の意）、女が Damen（Ladies の意）となっている。しかし、これをローマ字風に読んで、「ヘーレン（入れん）」と「ダーメん！」としてしまうと、どっちのトイレも使えなくなるので、気をつけましょう。（純）

# 宍道湖のライバル 十三湖のシジミ伝説

大塚　茂

宍道湖が全国一のシジミ漁獲量を誇る「シジミの宝庫」であることは、同湖周辺に住む人々にとっては常識のひとつと言ってよいだろう。だが、宍道湖に次ぐ第二のシジミ産地は？――と問われて即答できる人はそう多くはないはずである。

近年、二位の座を競っているのは十三湖（じゅうさんこ）と小川原湖（おがわらこ）である。どちらも青森県にある汽水湖で、年によって二位と三位が入れ替わる。農林水産省の統計によると、二〇〇三年の場合、十三湖が二位で漁獲量二三四一トン、小川原湖が三位で同二二五四トンだった。ちなみに、一位の宍道湖は七〇〇〇トンで、青森県の両湖の合計よりかなり大きい。

ところで、十三湖には素敵なシジミ伝説が伝わる。私がこのことを知ったのはごく最近のことで、東北電力が発行する『白い国の詩』という、これまた素敵な名前の文化情報誌を通じてである（二〇〇六年春号）。

その昔、このあたりは十三湊（とさみなと）と呼ばれ、鎌倉時代から室町時代にかけて国際貿易港として大いに栄えていた。言い伝えでは、その頃、十三湖にシジミはいなかったという。ところが、あるとき突然、大津波に襲われ、繁栄を誇った十三湊の街は一夜にして跡形もなく破壊され、たくさんの人命が奪われた。そのとき、山から飛んできたカラスがこの悲惨な様子を見て嘆き悲しみ涙を流す。その涙が湖に落ちてシジミになった。シジミは津波にすべてを奪われた街に神様が授けてくれた贈り物だった。――これが十三湖に伝わるシジミ伝説である。

その後の発掘調査によると、津波はあるにはあったが、それは十三湊が繁栄する以前だったと推測されている。しかし、そんなことはこのシジミ伝説にとっては、あるいはどうでもよいことかもしれない。

この話を知って、はたと考えた。そういえば宍道湖についてはシジミ伝説など聞いたことがない。あわてて何人かの人に聞いてみたが、やっぱり誰も知らない。十三湖に一本とられたようで、何とも複雑な心境だった。

十三湖のあたりでは、シジミ伝説にちなんだ「からすの涙」というお菓子も作られ売られているようだ。ゴマとシジミエキスが入ったマドレーヌタイプのお菓子と紹介されている（道の駅「十三湖高原」ｗｅｂページ）。

このお菓子も気にはなるが、やはりぜひとも賞味してみたいのは本物のシジミの方だ。市場の評価も高いと聞いている。十三湖のシジミ漁風景を眺めながら、シジミ伝説についてあれこれ想像し、熱いシジミのみそ汁でもいただければ最高である。

（おおつか・しげる／食料経済学）■

# 私が英語を読む理由

## ――自己紹介的小文――

松浦雄二

私は、総合文化学科で「英文学」に関わる科目を担当することになっています。一般の方に、「英文学」をやっています、と自己紹介的に言ったときには、「ああ英語をなさってるんですか」とか「じゃあ英語はぺらぺらですね」とかおっしゃる方は割と多く、そのような場合「いや、それは……」と修正したい気持ちにかられます。「英文学というのは……どういえば一番わかりやすいだろうか……」と、頭の中では言葉がぐるぐる回っているのですが、そうやって一人思いあぐねている内に、気がつくと相手の方は、「それでは……」と、すでにスタスタ去って行かれた後だったりします。

「英文学」をやっていると言って、上のような反応しか帰ってこないとき、それが少なくとも私が学生であった二十数年以上ほど前とあまり変わらない反応であると思うとき、日本に「英文学」がやってきて百年以上たつのに皆の知るところとなったとは言えないのは、いったいどうしてなのか、と思うのですが、そのことはいつかどこか違う場所でぼやくとしまして、取り敢えず今は「英文学」の話しを続けたいと思います。

「英文学」の「英」はもちろん「英国」の「英」でありますから、「英文学」は当然英語で書いてあり、その意味では確かに私は「英語」をやって居ります。それでは「英」にくっついている「文学」とはどういうものかと問われれば、世の中に難問は色々ありますが、これが難問中の難問の一つでありまして、いきなり白旗が上がってしまうのですが、ただ私は、授業ではいつも、「文学とは？と、訊かれて答えるのは難しいが、少なくとも文学には人間と人間の心のことが書いてある」と言っています。

人間と人間の心について書いてあるということであれば、「英文学」とか「仏文学」とか「日本文学」とかは、「英」「仏」「日本」などのことはもちろん、「英」「仏」「日本」を越えた所で結びつく、「人間」にとって大事な（役に立つ、と言ってもいいと思いますが）ことが書いてあるとお察しいただけると思います。ただ、「英語」とか「日本語」とか、「言語」の要素はとても重要でして、これがきちんとできていなければ「英文学」も「日本文学」も成り立たないという、「言語」と「文学」の関係があります。文学は言語表現の技術にかかわる、言語による芸術なのです。

また、さきほど、文学は人間と人間の心について書いてあると学生諸子に話している、と申しましたが、もう一つ、「文学」は「人間の生きる現場に即して書いてある」とも話しています。「生きる現場」の話ですから、抽象的な議論ではなく、描かれるべき具体的な「状況」とか「出来事・事件」がまずあり、それがひいては「文化」とか「歴史」なども背景にしていることがわかります。（もちろん状況や出来事の描き方は、書き手の「哲学」なり「思想」なりを必ず反映していますし、「哲学」や「思想」そのものが作中に披瀝される場合もあります）

ところで、私自身の話ですが、私は英文学の中でも、シェイクスピアに心惹かれています。私が英文学に係わり合いを持ち続けているのは、実にこの約四百年前のロンドンで活躍した劇作家と学生時代に出逢ったからです。

私はかつて文学部の英文科というところに入りながら、さて英文学とは、よく考えてみるとほとんど知らない、詩っていったいなんだ？　文学とは？などということを、新入生となって初

めて考え出した迂闊な学生でした。そういう疑問を思いめぐらすことが慢性病のようになってしまった時期に、たまたま出逢ったのがウィリアム・シェイクスピアであり、その出逢いは、色々考えていたというより考え方そのものがわからず堂々巡りをしていた頭に、ガツンと一撃を食らったような大きな衝撃でした。

詩とはいったい何だ？　その答えは依然として言葉では説明できませんでしたが、「これが詩というものである」としか言いようがない作品が目の前にあったのです。それはいわゆるシェイクスピアの四大悲劇の一つ、『マクベス』という作品でしたが、私はそのときの強烈なパンチについフラフラとしてシェイクスピアを専攻してしまい、英語の力がそうとび抜けていたわけでもないのに、そのまま勉強を続けて散散苦労することになりました。

私が英語を勉強し続けているのは、シェイクスピアがイギリス人だからであり、もし仮にフランス人であれば、路線変更をしてフランス語を勉強し直すか、あるいは怖気づいて勉強することそのものを断念するようなことになったかもしれません。どうもわからぬ台詞を前にして悪戦苦闘、息が上がりそうになり、シェイクスピアが現代の日本人だったらさぞや楽チンであったろうと幾度も思いましたが、そういう苦労をしながらも、歳を累ねるごとにこの劇作家はますます引力が強くなり、今でも読んでいるのです、といいますか、一生つきあえる作家であると思っています。

さて、上で、文学とは人間の具体的な「現場」にかかわる言語の芸術である、と言いましたが、次の機会には、具体的にシェイクスピア作品の姿を見てみたいと思います。

（まつうら・ゆうじ／英文学）

■

# 夏の昼下がりのあるパーティー

マユーあき

夏の蒸し暑い日曜日の昼過ぎ、缶ビールと手作りデザートをおみやげに、夫と子どもと一緒に近所に住む知り合いのイギリス人の家に出かけた。「ランチ・パーティーをするから来てね」とお誘いを受けていたのだ。

前を何度か通ったことはあっても中に入るのは初めてという彼女の家は、間口がちょっと狭くて奥行きの深い鰻の寝床のような造り。玄関で私たちを迎えてくれた彼女は日本語を現在勉強中と聞いていたので、「ねえねえ、こういう家のことを日本語でなんていうか知ってる？」と、玄関でいきなり日本語の問題を一問出してみた。すると、「ウナギノネドコ、でしょ!?」。すかさず返ってきたのは正解。どうやら、日本語の勉強は着々と進んでいるらしい。

玄関からは、一番奥の部屋ですでに先客たちがわいわいやっているのを見通すことができ、私たちも、一つ一つの部屋をちょっと失礼とばかり縦断し

て、その輪の中に加わった。

みんなが揃ってみると、バングラデシュ人、ニュージーランド人、イギリス人、ベルギー人、日本人、と小さな集まりにしてはなかなか国際色豊かな顔ぶれ。そういう訳で、と言えるのかどうかわからないが、会話は自然、みんなのコミュニケーション手段の最大公約数と思われる英語と日本語で、ということになった。話題によっては英語だったり日本語だったりするし、話の途中で日本語から英語、英語から日本語へと変わることもしばしばで、きっと頭の中では言語の切り替えスイッチが忙しくカチャカチャ音を立てていたことだろう。

さて、このような集いでの楽しみの一つは、やはり招いてくれた人が心をこめて用意してくれた料理を味わうこと。イギリス人の彼女の料理をいただくのは初めてであったが、どうやら日本語だけでなく、料理のほうも日本人の友達から習って何品かマスターしていると見える。日本の家庭の食卓で登場するおなじみのものも何品か器に盛られ、テーブルの上に用意されてあった。その中の一つ、茄子に細かく切れ目を入れて油通ししたものに生姜を効かせた醤油風味であっさりと味付けしたものは、なかなか美味であった。

一方、「えっ！」と驚かされたことも、実は一つあった。白い皿の上に赤いものがこんもりと山のように盛り付けられていたので、何だろうと思ってよく見ると、なんと梅干……。ホテルの朝食バイキングの和食コーナーでこんな風に盛りつけられた梅干を見たことがあるような気はするが、それを倣ってみたのだろうか……。ちょっとびっくりはさせられたものの、その皿の上の「梅干山」は彼女らしい気取りのなさを感じさせもした。

料理に劣らず、集まった人たちとの楽しいおしゃべりもこのようなパーティーのもう一つの楽しみである。この日は、よく知っているニュージーランド人のカップル以外はほぼ初めてお会いする人ばかりだったが、お互いに自己紹介した後は和気あいあいとした雰囲気の中で話に花が咲いていった。

バングラデシュ人の留学生カップルは、どこかで見たことがあるなあと最初に思ったが、どうも記憶がはっきりしない。いろいろ話していくうちに、以前、何かのイベントの時にバングラデシュ料理の屋台店を出していた人たちであるということがわかり、それで合点がいった。その時、私も彼らの作ったカレーを食べたのだ。

全くの初対面であった三人の日本人女性たちも、とても気さくで感じのよい人たちだった。一人の女性はパートナーがコロンビア人、もう一人の女性はボーイフレンドがカザフスタン人とのこと。日本語の「国際結婚」に相当する英語の international marriage という言い方は、あまり実質的な意味を持たないので実際にはあまり使わないと聞いたことがある。国籍や人種の異なる男女間の結婚は一般的なことなので、とりたてて marriage を限定する international をつける必要がないのだ。いずれ、日本語でも「国際」をつける意味合いが次第に薄れていくのかもしれない。

話が弾んでお互いのことが少しわかるようになってきたころ、日本人の中でただ一人の男性Aさん（ここでは仮にこう呼んでおこう）が、辛口のユーモアを交えながらよく喋るベルギー人の私の夫に少なからず興味を持ったようで、いろいろ話しかけていた。そして、そのうちにどうやら「一体この男、何歳だろう？」という思いが抑えきれなくなったらしく、ついに、How old are you?と質問してしまった。この夫、年齢を聞かれることにちょっとしたアレルギー反応を示す人なのに……。

案の定、「ほら、きたぞ。どうして日本人はすぐ年齢を知りたがるのかねえ」と、夫はAさんの質問に答える代わりに、他の外国人の仲間に話を振って援軍を求めた。すると、「うん、そうそう」と同意の声が上がり、私もこんなことがあった、僕も……、とそれぞれが自分の経験談を披露し始めた。よく日本で屈託なく年齢を尋ねられることには、彼らもやはり多少の違和感を持っているようだ。

みんなの話をしばらく黙って聞いていたAさんは、なぜ日本人が人の年齢をしばしば知りたがるのかここでひとつ言っておかねばと思ったらしく、「だって、日本では年長者を敬うように教えられているんだよ。自分より年上の人に対しては、それなりのことば遣いや振る舞いをしなければならないし……。日本の一つの大事な文化ですよ！それがなくなったら、日本じゃなくなるんだから！」それまでに飲んだビールの酔いの勢いもあってか、少しばかりテンションが上がっていた。しかし、この話題はそれほど深まることもなく、話は次へと移っていった。

夕方になってもまだむっとする外気の中で蜩（ひぐらし）の鳴き声が響きだすころ、昼下がりから始まったこのパーティーもお開きとなった。招いてくれた彼女の手料理と集まった人たちと過ごした楽しいひと時でお腹も気持ちも満たされ、家路に向かう私たちの足取りはとてもゆったりとしていた。

（まゆー・あき／英語学）

# 移動の文化

小玉容子

私の初めてのアメリカへの旅、留学のための移動の経験から始めることにする。三十年ほど前のことだが、ロサンゼルスで一泊し、翌日、目的地のアリゾナ州フェニックスに飛ぶ予定だった。日本からの飛行機で、隣の座席の日本人女性が声を掛けてくれた。その方の親戚がロサンゼルスに住んでいる、迎えに来るからホテルまで連れて行ってあげる、ということになった。旅は道連れの恩恵である。

「水平な街」ロサンゼルス。ただただ横へ横へと空間が広がっている。初めての景色に心を躍らせながら、小さな飛行機に乗ってフェニックスに着いた時は、暑いというより、熱かった。一九七七年八月十九日発だったので、この日は二十日。夏まっさかりではあったが、その熱気は半端ではなく、息ができず、声も出なかった。空港ビルは快適だった。が、その日は土曜日で、大学の事務局とは連絡が取れない。月曜日まで二晩、さてどうしよう、とにかくホテル。

大学はフェニックスの隣町、テンピーという町にある。ホテルはどう探そうか、どうやって隣町まで行こうか、困って立ち往生していた場所がちょうどレンタカーのカウンターの前で、そこのお姉さんが助けてくれた。予約を取ってくれたホテルの名前が「バガボンド・ホテル」(vagabond ＝流れ者、放浪者)だった。私もある意味ではバガボンドということで、気に入った。

『ピクニック』というアメリカ映画がある。原作はウィリアム・インジという劇作家の同じ題名の舞台劇だ(一九五三年)。中西部カンザスの田舎町が舞台で、そこに住む若い娘は列車の汽笛が聞こえるたびに、都会へ出る事を夢見ている。そんな町に、ハンサムな若い流れ者ハルがやって来る。彼は、娘の家の隣家で、朝食のお礼に力仕事をしている。定番どおり若い男女は動物的な勘で惹かれ合うのだが、彼を説明するト書きは次のようになっている。

「ハルはごみバケツを肩に乗せて登場。非常に男前でがっしりした体つきの若者である。Tシャツにジーンズ。カウボーイブーツを履いている。少し前なら彼のことを〝流れ者(vagabond)〟と呼んだだろうが、今では〝浮浪者(bum)〟と呼ぶ」。英語で〝bum〟となると、「物乞い」の意味合いが入ってくる(*Picnic* in *Four Plays* by William Inge, 1958)。バガボンドとは、日本で言えば、雰囲気は異なるが、フーテンの寅さんのような感じだろう。

流れ者が中心人物となって登場するアメリカ文学作品は多い。ジョン・スタインベックの小説『ハツカネズミと人間』(一九三七年)は、仕事を求めて転々とする男二人組の物語だ。二人はいつか農場を買い、そこに落ち着く生活を夢見ている。「身を落ち着ける」という言葉は、放浪する人たちが常に思い描く夢でもある。『ピクニック』の若い男女も、結婚し、どこかの町に身を落ち着けるつもりで田舎町を出る。放浪(移動)の後に「落ち着く」ことは「アメリカの夢」でもある。

夢の実現は難しい。叶わぬ夢を追い求め、あるいは夢が夢を呼び、移動は続く。「アメリカの夢」は止まることのない夢でもある。そもそも、アメリカの歴史は移動と定住で始まり、その継続でもある。十七世紀の北部への移住者たちは信仰の自由を求め、「丘の上の町」(聖なる共同体)を建設しようとアメリカへやって来た。定住をはじめても、ローラ・インガルスの『大草原の小さな家』シリーズのように、より可能性のある場所を求めて移動を続ける人たちもいた。現代アメリカも、もちろん、モバイル(可動性の)社会である。仕事を求めて移動するし、収入にあわせて住まいも変えていく。アメリカは国内からさらに世界へ、宇宙へと目を向け、進んできている。この可動性がアメリカのエネルギーとなっている。しかし、可動性は不安感、不安定を伴うものでもある。

夢と希望を胸に前進する、フロンティア精神といっても良いだろうが、その姿勢は植民地時代、そして建国後から現代に至るまで、保たれている姿勢だ。光と陰を併せ持つこの前進姿勢＝移動の文化はアメリカ文化の若さの象徴でもある。そのようなアメリカと私が関わり始めてから三十年余り。可動性の持つ不安定さ、そこから生まれるエネルギーを求める気持ち半分、避けたい気持ち半分である。

(こだま・ようこ／アメリカ文学)